

エルネスト・メソニエの「顕微鏡視的絵画」とサロン戦略

西田 創（岐阜県美術館）

ジャン＝ルイ＝エルネスト・メソニエ(1815-1891)は、19 世紀半ばから後半のフランス画壇において最も知られた画家の 1 人であった。美術学校でアカデミックなキャリアを積むことなく、ほぼ独学で絵画を学んだメソニエにとって、パリのサロンで人気を得ることが画家としての成功の手段であった。1834 年に 19 歳でサロンにデビューしたのち、相次いでメダルを獲得するなど、七月王政期(1830-1848)のサロンを通して認知され名声を確立した。

メソニエはデビューより 30 年以上サロンに参加し続け、主に歴史趣味の風俗画を出品した。主題自体も興味深い、メソニエ作品で特に注目すべきは作品の「小ささ」である。当時より「顕微鏡でしか見えない絵画」(La peinture microscopique)と評されるなど、際立った特徴の一つであった。これまで多くは言及されてこなかった、カリカチュアなどのイメージ資料にも、メソニエ作品の小ささを風刺対象とした例が多数確認される。メソニエ作品の小ささとサロンとの関係については、すでにクリューガーによって論じられている。しかし、マイケル・フリードの「没入性」の理論を援用し、主にサロンに関する批評的言説に注目したその論は、事実関係を十分に反映しておらず、概して抽象的な議論にとどまっている。

これに対し本発表では、メソニエの評価を確立させた七月王政期のサロンを対象に、メソニエ作品の小ささの度合いについて、統計的手法を用いて分析する。分析資料には、当時のサロン運営当局が作成したサロン出品作の登録簿を利用した。同資料には、応募作品の額寸に関する記載があり、小さな作品フォーマットを特徴とするメソニエ作品の分析にあたって重要な資料となる。これを活用することで各回のサロンに出品された全絵画作品のサイズ分布をグラフにより可視化する。この分析から、第一に、メソニエ作品は、他のサロン出品作と比較しても最小クラスの作品であったことを示す。第二に、そのような小さなフォーマットの作品は、サロン全体の分布の中で希少であったことを明らかにする。このような例外性によって、メソニエ作品はサロン空間のなかで独自の位置を占めることができた。

その特異な作品形式はまた、独特の鑑賞文化も生み出した。同時代の記述において語られる通り、メソニエ作品の鑑賞には、しばしばルーペが用いられた。小さな作品をルーペで時間をかけて鑑賞する方法では、同時に作品を鑑賞できる人数が少数に制限されたため、メソニエ作品の前にはしばしば人だかりが生じた。その群衆そのものも、サロン会場でメソニエ作品の位置を目立たせ、人気を可視化し喧伝する装置になり得るものであった。ここに、作品を出品して批評を待つ消極的な画家像ではなく、例外的な作品フォーマットを巧みに選択、活用することで、サロン空間そのものをもメディアとして戦略的に活用する積極的な画家の姿が鮮やかに浮かび上がる。